

研究結果報告書

近代日本の中国に対する地質調査活動：西南地域を中心に

所属：四川外国語大学 日本語学部

役職：准教授

氏名：王宗瑜

本研究は、山田邦彦と小林久平や小林儀一郎を事例に近代日本が実施した中国西南地域に対する地質調査を取り上げている。

1902年、京都帝大教授山田邦彦は外務省の命令で四川・雲南・貴州地域の地質鉱物調査を実施した。その担当地域は広大で、しかも「担当地域ハ勿論其近傍ニ於テ有用鉱物ノ存在ヲ聞知スル件ハ悉ク之ヲ踏査スヘシ」と要請されたように、同調査はまだ広範な情報収集の範疇に属している。そして、同調査は1903年の『申報』に報道され、1904年に『地質学雑誌』などに旅行談としても発表された公開活動である。しかし、山田は外務省に詳しい報告書は提出しなかった。『楊子江上流地方調査日誌』（1936年）が出版されたのは彼の死後である。

1906年、化学者小林久平が教習として湖南に赴任した後、自費で四川の石油産地と塩井を調査し、四川は「石油産地と称す可からず」、「将来石油産地としての発達は望むべからざらん」と結論付けた。彼は報告を1907年の『地質学雑誌』などに発表し、さらに1939年に調査日誌も公開した。

1914年、農商務省技師小林儀一郎が省令で四川の地質・鉱産資源を調査した。派遣の理由として、当地の資源調査と開発は急務であること、山田調査の対象地域は広漠で精密さを欠けていること、山田の報告が提出されていないことが挙げられた。ただし、公開活動である山田調査に対し、小林調査は極内密に行われ、彼と同行者も夫々「変名シ表面純然タル學術研究ノ名義ニテ出張スル」ことになった。

こうしてみると、近代日本の中国西南地域に対する地質調査には民間人活動も入っているが、主に国家機関が利権に対する関心から出たものである。しかも、公開で広範な情報集めを目的とする最初の段階から、秘密裏に重点的な調査という段階になっていく。これは当時の日中関係を含む国際情勢の変化と無関係ではない。その後の調査活動や、西南地域と他の地域における調査の異同については今後の課題としたい。

研究成果の公表について

口頭発表 （題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

- ①「日本教習小林久平の両湖、川黔之行——以対化学工業和油井的考察為中心」、王宗瑜、全球化下的機遇与挑戰——中日關係研究シンポジウム、2017年9月、清華大学
- ②「明治時期日本政府对中国西南地区的地質考察——以山田邦彦為例」、王宗瑜、東亜漢文圈的日語教育・日本学研究新開拓シンポジウム、2017年12月、暨南大学
- ③「清末民初日本人对西南地区的地質考察」、王宗瑜、川大東北亜史講堂、2018年5月、四川大学

論文 （題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）

書籍 （題名・著者名・出版社・発行時期等）